



解説記事

地理学におけるジェンダー研究 —空間に潜むジェンダー関係への着目—

Gender studies in human geography :
observation on gender relations hidden in space

吉田 容子

Yoko Yoshida

男性による女性支配システムの構造解明や、そこに発生する権力関係のあぶり出しを目指すジェンダー研究は、いまや多様な学問領域に浸透している。地理学においても、1970年代に入ると、英語圏の女性研究者たちの間から、従来の地理学研究が男性中心主義に偏ったものであるとする批判がなされるとともに、空間に刻まれた男女の非対称の権力関係、すなわちジェンダー関係をあぶり出す作業が行われるようになった。本稿ではまず、英語圏を中心としたジェンダー研究の展開を整理する。次に、日本の地理学におけるこの方面の研究をもとに、これまでの到達点を明らかにする。さらに、個人レベルの男女間に潜む権力関係に着目し、それがより大きな権力関係へと転化され空間に刻まれ、そして、またそれが、空間に映し出されていることを示すため、二つの事例をあげる。一つは、大都市圏郊外につくられた「監視空間」ともいべき住宅地におけるジェンダー関係であり、もう一つは、1950年代に軍事基地の建設が本格化した沖縄で、米兵相手につくられた特飲街にみられるジェンダー関係である。

Gender studies have accepted in the various disciplines, which aim at making clear the structure of system that keeps female under male dominance and power relations that occur there. In the 1970s, many female geographers in the English-speaking countries criticized that traditional geography inclined toward masculinism and they endeavored to show asymmetrical power relations between men and women which are projected on space. The first purpose of this paper is to overview the progress of gender studies in the English-speaking countries. The second purpose is to review gender studies in Japanese geography. Thirdly, I would like to show two examples in order to examine gender relations hidden between men and women at private level, which are transformed to bigger power relations and then are reflected and projected on space. One example is the residential section that should also be called a "surveillance space" built in suburbs of the metropolitan area, and another is the pleasures area built for the U.S. soldiers in Okinawa when construction of military bases has begun in the 1950s.

キーワード：ジェンダー研究，ジェンダー関係，空間，男性中心主義

Key words: gender study, gender relations, space, masculinism

I 空間とジェンダー

1960年代後半における第二期フェミニズム¹⁾の流れから生まれた女性学は、ジェンダー(gender)に社会的・文化的な性差を表す意味を与え²⁾、従

来の諸学問が女性の存在や女性問題の重要性を看過した男性中心主義に偏ったものであることを指摘し、女性による自己認識の新しい学問としての領域を切り拓いた。ジェンダーとは、単に男性と女性とを区別する二分法にもとづく概念ではなく、

非対称の階層秩序である。なぜなら、男女のジェンダーは、単に上下に階層化されているのではなく、人一般を代表する「男」にとって主体であらざるもの（他者）が、「女」として定義されてきたからである。女性は、常に、男性から差異化され、差別される存在として位置づけられ、そのために、そこに権力関係が発生するのである。ジェンダー関係とは、男性と彼らとの差異化によって定義され、存在意味を与えられる、女性との間に生じる権力関係である。フェミニズムや女性学が、ポリティカルな文脈で使用される概念や理論として受け取られるのに対し、ジェンダーは中立的な分析因子とみなされ易く、それゆえ、ジェンダー研究は学界や行政で受け入れられてきた³⁾。しかしながら、ジェンダーとは決して中立的ではなく、権力関係が組み込まれた政治的な概念なのである。

地理学では、長い間、空間を無限で絶対的なもの、また、幾何学的次元のものとして捉えてきた。しかしながら、1970年代以降、あらたな空間概念が登場するようになった。すなわち、空間は、個人や社会集団から絶えず意味を与えられる、という人文主義的立場からの理解と、商品や貨幣の循環によって特定の空間は絶えず生産・再生産される、という新マルクス主義的な立場からの理解である。どちらの立場にせよ、(社会)空間とは、個人的・集団的な諸主体の行為を組み込んでいるものとして捉えることができるだろう。このような前提にもとづけば、空間は、ジェンダー関係によっても絶えず生産・再生産されるのである。

地理学における既往の研究では、民族、人種、階級、宗教などによる、差異化から生じる権力関係が空間に映し出された結果として、居住地域の分化という可視的現象が詳細に把握された。しかしながら、ジェンダー関係が生み出され、それが空間に刻まれていく過程、すなわち「空間のジェンダー化」に関心が向けられるようになったのは、最近のことである。社会学の分野で、上野(2002)が、「人間と社会に関わる領域で、ジェンダー化されていない領域はない」と述べている。この見解を前提とすれば、地理学の対象である空間の領域で、ジェンダー関係が刻まれていない空間など考えら

れない。ただし、そうした空間が、すべて可視化される状態にあるとは限らない。空間に潜む可視化されないジェンダー関係をあぶり出すことは、空間に包み込まれている社会的諸関係を明らかにするうえで、重要なのである。

II 地理学におけるジェンダー研究の展開

男性による女性支配システムの構造解明や、そこに発生する権力関係のあぶり出しを目指すジェンダー研究は、いまや多様な学問領域に浸透している。地理学においても、1970年代以降、英語圏を中心に「フェミニスト地理学」が確立され、従来の地理学研究を、男性中心主義に偏ったものと批判するとともに、空間に刻まれたジェンダー関係をあぶり出すことに着手した。本章では、まず、英語圏を中心としたジェンダー研究の展開を整理し、次に、日本の地理学におけるこの方面の既往の研究をもとに、これまでの到達点を示す⁴⁾。

1. 英語圏にみるジェンダー研究の動向

1970年代の欧米の地理学界では、男性中心主義的なものの見方に依拠してきた従来の地理学に、異議申し立てを行う者たちが現れた。例えば、1973年と翌1974年の学術雑誌 *Antipode* には、地理学において性別間の関係を重視すべきことを示唆する論考が、1編ずつ掲載された。1978年の *Area* や1982年の *The Professional Geographer* では、従来の地理学に性差別的なバイアスが存在してきたこと、そのために、主体としての男性から他者としかみなされない女性が、地理学における議論から排除されてきたことへの批判が示された。

Pratt は、1970年代から1980年代初期の研究を、「女性の地理学」と捉える⁵⁾。この時期における研究では、既婚で就業中の男女の通勤距離や公共交通・サービス機関への近接性、居住地選択などが比較された。その結果、一般に、女性の行動の方が、男性のそれよりも空間的な制約が大きいことが明らかになった。このことから、女性は家事・育児に代表される家庭内での役割分担のため、日常生活の中で男性よりも不平等を被り、行動面で

も空間的に制約されていると結論づけられた。この時期における研究では、女性の不平等で制約された状態を記述し、地図に示すことが目標とされた。こうした作業を通じ、従来の地理学において議論の俎上にのることのなかった「女性」の存在が、明らかになった。

1980年代に入ると、フェミニスト地理学は、社会主義フェミニズムからも影響を受けるようになる⁶⁾。それには、次のような変化が背景にあったと考えられる。例えばアメリカ合衆国では、第二次大戦後生まれの「ベビーブーマー」の中で、大卒女性が数字上初めて男性を上回り、1970年代以降は、女性の就業率も年々増加する傾向にあった。さらに、1980年代以降、女性を取り巻く社会的・経済的環境の大きな変化によって、既婚女性の就業率の上昇や、マイノリティ女性の社会的地位の向上、未婚や離婚による女性のひとり親世帯の増加など、就業女性の大幅な増加をみた。なかでも、既婚の就業女性は、距離の離れた職場と家庭の間で生産と再生産の両活動を担っていることから、職場と家庭の空間的分離や女性の二重労働負担、家事労働を非市場的・不払い労働とする問題などに、フェミニスト地理学者の関心が集中した。

男性による女性支配のシステムの中で、すべての女性が抑圧を経験しているが、その程度はみな等しいとは限らない。人種、民族、階級、宗教、年齢など、差異を生み出す別の階層秩序も根深く存在しており、ジェンダーとこれらの差異とを交差させることの重要性が、理解されるようになってきた⁷⁾。多様な差異の理論化は、いまやフェミニスト地理学研究にとっても、中心的論点となっている。そうした中で、フェミニスト地理学の関心は、「第三世界」の女性が経験する社会的・経済的な抑圧システムや、女性同様に、男性中心主義の言説から除外されてきた人々（すなわち、子ども、高齢者、障害者など）が、日常の生活空間の中で受ける抑圧や制約へと向けられるようになった。さらに、「異性愛社会」⁸⁾の中で、同性愛者の行動が制約され、異性愛者とは別の生活空間を形成していることなどにも、関心が示されるようになった。また、公的空間・私的空間のどちら

においても、女性の身体が暴力にさらされていることを重大視する研究も始まった。

英語圏における地理学は、ジェンダー概念を導入したフェミニズムの理論を摂取し、男性中心主義的なものの見方に異議申し立てを行いながら、フェミニスト地理学を確立し、発展させてきた。パラダイム・チェンジとも言うべきこうした新しい動きが、日本の地理学にどのように受け止められ、どのような影響や成果があったかを、次節で簡単に概観してみたい。

2. 日本における研究

日本では、1990年代に入ってようやく、フェミニスト地理学への関心が示されるようになった。英語圏における初期の研究が既婚の就業女性を対象としたように、日本での研究も、当初は、就業女性の通勤行動や居住地選択、公共サービスへの近接性を取り上げる傾向があった。世帯のライフステージに着目して、既婚女性の通勤行動の変化を子どもの成長との関係から分析した研究や、大都市圏の大規模ニュータウンを対象にして入居者夫婦の居住地移動や通勤行動を分析し、ライフステージや男女間の差異の影響を明らかにしようとした研究、また、単身女性や経済的に困窮している女性の居住地選択や住宅問題に関する研究などがある。さらに、子どもを持つ就業女性にとって保育所の立地は重要な問題であることから、立地-配分モデルを用いた保育所の最適立地についても検討された。

女性に着目した研究が増加の傾向にあることは、この方面の研究が前進しているとして評価できよう。しかしながら、これらの研究では、分析のカテゴリーとして、性差による二分法の有効性が認識されたにすぎない。従来、『国勢調査報告』などの統計類では、男女別の集計が行われていない項目が目立ったが、近年は多くの項目で採用されるようになったことから、「男性」のカテゴリーの分析・考察に、「女性」のカテゴリーのそれらが加わった段階にあると言えよう。それは、生物学的な男性/女性の単なる二項対置の構図の中での議論にすぎないのである。ジェンダー研究に求められ

ているのは、男性にとって主体であらざるもの（他者）として女性が定義されてきた、すなわち、非対称のジェンダー関係の中で、捉えていくことである。また、ジェンダーの視点から分析や考察がなされているにもかかわらず、ジェンダーが政治的な概念であるためか、あるいは、研究者が、ジェンダーに無自覚なためか、ジェンダー研究として位置づけることを避ける研究者が、少数ではあるが存在することにも、触れておきたい。

とはいえ、次のような興味深い研究もある。例えば、男性とは異なる性を持つことによって、都市空間においても、男性より制約された状況に置かれることの多い女性たちが、いかにして空間に介入し、空間を構築しているのかという観点からの研究(影山 2004)や、女性労働者たちが地域社会の中で体験した差別的なまなざしを、ライフ・ヒストリーから明らかにし、当時の女性労働者が抱える社会・経済的問題を浮き彫りにした研究(松井 2000)は、女性間の差異への注目が重要であることを示している。また、ジェンダー化された空間の中で疎外を受ける中年シングル男性に着目し、ジェンダー関係が女性のみにも制約や不平等を与えているとは限らないことを論じた研究は、女性を対象とすればジェンダー研究として受け取られてきた従来の誤解を解きつつ、男女の関係性に留意すべきことを示した(村田 2000)。

Ⅲ 空間に潜むジェンダー関係

男女のジェンダーが非対称に構造化されたものであることに留意しつつ、研究対象を分析・考察することが、フェミニスト地理学にとって重要であることは、すでに言及した。本章では、ジェンダー関係がどのように空間に刻まれているのか、またその結果、ジェンダー化された空間がどのように立ち現れるのかを、二つの事例からみていく。

1. 郊外住宅地にみるジェンダー関係

最近つくられる郊外住宅地は、防犯・監視の目的から、種々の工夫がなされているものが多い。京阪神大都市圏の外縁部にあたる大阪府最南端の

岬町で、ハウスメーカーA社が単独で、丘陵地を造成し開発を進めている郊外住宅地「リフレ岬 望海坂(のぞみざか)」も、そのひとつである⁹⁾。A社では、住宅地をどのように特徴づけて他と差異化し、付加価値を持たせるかを検討する上で、大阪市全域と隣接の和歌山市の一部の地域において、折り込み形式でアンケート調査を実施した。回答したうちの70%近くの人が、住宅や街の防犯に高い関心を持っていることがわかった。この結果を踏まえて、A社では、住宅開発のコンセプトに街全体の防犯と安全に配慮した、タウンセキュリティシステムの導入を掲げた。実際に、この街で採用されているシステムの特徴は、WEBカメラを用いた街の「見守り」と、常駐警備員による24時間の巡回である。

WEBカメラは、街の入り口と2カ所の公園に1台ずつ、計3台が置かれている。全戸にパソコンが完備され、住民専用のサイトを通じてWEBカメラの映像を、どの世帯のパソコンからもリアルタイムで点検することができる。専用サイトへのアクセスに必要なIDとパスワードは、この街の住民だけに与えられており、通常、警備員が映像を見ることは許可されていない。A社では、WEBカメラを、警備員が街を監視するためではなく、住民が互いを見守るためのツールとして位置づけている。さらに、この街に配置されている24時間交代の専属の男性警備員3名が、1日に8回程度の巡回を行って、登下校の小学生や、通勤、買い物の住民に声をかける。また、全戸に取り付けられた防犯・防災用センサーが作動すると、警備員が早急に駆けつけるシステムになっている。彼らは街の全入居世帯の家族情報を預かっており、巡回を通じて住民の顔・名前や居住先を確認する作業を行っているため、見慣れぬ訪問者の不審な行動を、直ぐに察知することができるという。

ところが、空き巣の被害が1件あった。セキュリティシステムを過信して、1階の窓を開けたまま2階に居たことが原因らしい。この街のセキュリティシステムがいかに完璧であるかは、多くのメディアを通じて不特定多数の人々に情報が浸透しているが¹⁰⁾、犯人は日本語の理解が不十分な外国人



図1 岐阜市「マザービレッジ岐阜」
(2005年8月筆者撮影)

Figure 1 'Mother Village Gifu' in Gifu City

であったことから、A社では、宣伝効果による抑止力が及ばなかったと捉えている。

「リフレ岬 望海坂」の外周は塀やフェンスで囲われているわけではないが、周辺に一般住宅の立地がないため、造成中の丘陵地に、この街だけが単独で存在する。一方、住宅地の開発が段階的に進められてきた地区の一面に新しく住宅地がつくられる場合、最近の防犯と安全への関心や他との差異化から、住宅地を塀やフェンスで囲って外部と区別し、ゲートを設けて訪問者の自由な出入りを制限するシステムが配備される傾向がある。

JR「岐阜」または「名鉄岐阜」駅より北西へ車で約5分のところ、岐阜市長良川左岸の旧河川敷を利用して開発が進められている「マザービレッジ岐阜」¹¹⁾の特徴のひとつは、ゲートタウンの構想である(図1)。アメリカ合衆国カリフォルニア州につくられた大規模ゲイテッド・コミュニティ「コト・デ・カザ(Coto De Caza)」を、この街の開発担当者たちが視察し、街づくりの参考としたという。住宅地の外周を鉄製フェンスで囲い、正面ゲートには電子セキュリティシステムを導入し、この街の住民にしか配布しないICカードでゲートの開閉を管理する。ゲートのインターホンから訪問先を呼び出すと、その画像が自動的に録画される仕組みで、不在の場合も、訪問者の確認ができる。開発にあたるB社では、監視機能を備えたゲートが無言の抑止力となって、不審者の侵入を排除すると考えている。



図2 愛知県春日井市「高森台の家」
(2005年8月筆者撮影)

Figure 2 'House of Takamori-dai' in Kasugai City, Aichi Prefecture

また、JR「名古屋」駅から、中央線で快速列車を利用して約30分、「高蔵寺」駅の北側に広がる愛知県春日井市「高蔵寺ニュータウン」¹²⁾内の北端に位置する「高森台の家」¹³⁾でも、開発のコンセプトに安全な街づくりを掲げている。完成時には57戸から成るこの街の外周は、高さ2mほどの塀で囲われ、車の進入路は2カ所に制限されている。街の5カ所に監視用カメラを設置し、その画像は自動的に録画される仕組みになっている(図2)。

「マザービレッジ岐阜」と「高森台の家」の特徴は、外周を塀やフェンスのような物理的障壁で囲い、住宅地の内部と外部とを明確に区別していることである。アメリカ合衆国のゲイテッド・コミュニティのように大規模ではないものの、その街づくりを参考にしている。また先述の「リフレ岬 望海坂」の場合、住宅地が物理的障壁で囲われているわけではないが、街の中に設置された「見守り」カメラや、警備員の巡回という「見えない」塀やフェンスが存在する。可視的な境界であれ、不可視の境界であれ、異質な者の侵入を排除するため、そこに張り巡らされる監視の目は、カメラや、警備員の巡回というかたちで、これらの街の中に浸透している。境界によって全体から切り取られた街は、「管理」あるいは「監視」される空間なのである。そうした意味で、これらの郊外住宅地は、「要塞町」と呼ばれるアメリカ合衆国のゲイテッド・コミュニティのもつ特徴の一面を、有していると言えるだろう¹⁴⁾。

では、外部と遮断された街の中で、安全を守られているのは、いったい誰だろう。街の住民に違いないが、とりわけ、1日の多くの時間を街の中で過ごす主婦、子ども、高齢者ではないだろうか。都心部の職場まで毎日通勤する男性（夫）にとって、郊外の住宅地はまさに「ベッドタウン」である。彼らの勤務中、自分の家族を守ることは物理的に不可能である。その代わりに、「見えない」境界や可視的な境界が、家族を守る装置として施されている。

職場という生産活動の場から、空間的に切り離された郊外空間は、生産活動の主体である男性が家族とともに住まうプライベートな空間であると同時に、女性（妻）が再生産活動を行う空間でもある。「男は外で働き、女は家庭を守る」という固定的な性別役割分業の観念が、近代都市の形成過程において暗黙裏に反映され、近代的な工業生産システムが形成されるなか、職場と家庭が空間的に分離し、再生産が行われる場としての郊外がつけられた。この郊外の一部が「見えない」境界や物理的境界で切り取られ、外部から遮断され、テクノロジーや、警備員の巡回によって、「監視」される空間と化したのであるが、実はこの空間は、男性（夫）が彼らのマスキュリティ（男らしさ・男性性）を発揮して家族を守っている空間なのである。マスキュリティとは、従来、社会において男性という性別に期待されてきた行動力・積極性・攻撃性・競争意識といった男らしさ（男性性）と言い換えてもよい。実際、彼らは1日の多くの時間を職場という公的な空間で過ごすため、彼らに代わってマスキュリティを付与されたWEBカメラやIT設備、また警備員が、最大限にそれを発揮することが期待されているのである。

2. 沖縄の旧特飲街にみるジェンダー関係

1945年の沖縄戦敗北と同時に米軍に占領されて以来、沖縄は「アジアの防共の砦」として機能してきた。1972年の本土復帰以降も米軍の駐留が続き、「基地の街」沖縄が抱える問題は、ますます複雑化している。地理学においては、戦後の沖縄における都市化や商業地の形成過程、軍用地返還後の土

地利用、また、異なる民族集団ごとのすみ分けなどに関する詳細な研究が、堂前(1997)などによって蓄積されてきたが、それらの多くは、現象面の考察に終始している。本節では、極東最大の空軍基地嘉手納飛行場を控えた沖縄市(旧コザ市)につくられた「特飲街」を事例として¹⁵⁾、沖縄の都市空間に刻まれたジェンダー関係をみていく。

米軍の沖縄本島上陸後から、米兵による女性・女兒への暴行事件が多発し、米軍が駐留する地域ではその対策に苦慮していた。越来(ごえく)村(1956年コザ市昇格)では、米兵による性的暴行から「一般女性」を守るため、当時の村長らがやむをえず、村外れの八重島地区にいわれる公認売春地区としての特飲街をつくることを、米軍側に提案した。1950年2月、「ニューコザ」と呼ばれる特飲街が形成され、最盛期の1950年代には百数十軒のバーやクラブが軒をつらね、約300名のホステスが米兵相手に働いた。また1949年11月、センター通り(現パークアベニュー)に米兵相手の商店街をつくる「ビジネスセンター」構想が持ち上がったが、当初の計画からはかけ離れ、米兵相手のバー、クラブ、カフェーが進出し、1950年代に入ると特飲街を形成した。同じ頃、軍道13(現国道329)号と同24(現国道330)号が交差するコザ十字路より南の照屋地区に、外国人相手の飲食店、バー、クラブが建ち並び、さらに、風俗営業、映画館、遊技場、旅館、質屋、外国人相手の洋裁店なども出店し始めた。やがて、照屋の特飲街には「黒人街」が、コザ十字路からセンター通りには「白人街」が、形成されていった(図3・4)。

特飲街の飲食店などは、「Aサイン」によって管理された。1953年に「米軍人、軍属の健康と福祉の増進」を目的に、風俗施設認可基準が設置されると、これに合格したバー、クラブ、飲食店などに営業許可証を与え、APPROVED(許可済)の頭文字Aの店頭表示を義務づけた。Aサイン店で働く「特殊婦人」は、1956年当時のコザ市に2,000人近くいた。ダンサー、ウエートレス、レジ係をはじめ、米兵相手の店で働く全女性は週1回の性病検査が義務づけられ、米兵が病気に感染すると、店への米兵の出入りを禁止する「オフリミッツ」を科した。こ



図3 沖縄(旧コザ)市照屋地区
(2005年2月筆者撮影)

Figure 3 Teruya district in Okinawa City
(Old Koza City)

れを受けると、多額の借金を抱えて家族のために働く女性たちにとって死活問題となるばかりか、基地に強く依存した沖縄の地域経済が大打撃を被った。米兵が特飲街で落とすドル、すなわち特殊婦人たちが稼ぐドルは、当時の沖縄の基幹産業であった砂糖きびやパイナップルの生産から得られる収益をはるかに上回り、基地の街の重要な収入源となっていたからである。

越来村では、八重島、センター通り、照屋のほか、吉原、ゲート通り(現空港通り)、中の町、諸見大通りなどにも特飲街がつけられ¹⁶⁾、家計を支えるため、沖縄本島はもとより離島からも、「性を売る女性」が、特飲街という「性を売買する」空間に集まってきた。外国人相手の商売が収入に安易に結びつくことがわかると、貧しい女性に前借金を負わせ、女性を管理して売春を行わせる業者が急増し、その結果として、業者から厳しい搾取を受ける女性が後を絶たなかった。女性たちは民家の離れを間借りし、そこでも非公認の売春が行われたため、教職員組合や婦人団体などから、青少年への悪影響の懸念が示された。しかしながら、女性への部屋貸しは当時大きな収入源となったことから、いわゆる公認売春地区である特飲街の範囲を越え、一般集落内にも、性を売買する空間が局所的に存在した。本土返還前の住宅地図から、当時の貸間の存在を確認することができる。

平井(1997)は、米兵による沖縄女性の買春は、



図4 沖縄市コザ十字路口付近
(2005年2月筆者撮影)

Figure 4 An old house nearby Koza Crossing

占領地の住民に対する、男性の女性に対する、支配／従属関係を維持させるための「基本的恫喝のメカニズム」であるという。確かに米軍占領下の沖縄では、占領／被占領の関係が男女関係のレベルまで具現化されていた。さらに、一般女性たちを占領側の性的攻撃から守る「防波堤」として、特飲街という「性を売買する」空間が日本側から提案され、特殊婦人が集められた経緯を合わせ考えれば、女性の身体が、いかに国家や男性中心主義の言説の搾取や犠牲の対象となったか、そして、特飲街をはじめとするこうした空間が、いかに占領／被占領の、また男女間の権力関係を複雑にはらんだものかを、理解することができる¹⁷⁾。戦後の沖縄の経済面において、女性は重要な役割を果たした¹⁸⁾。しかしながら、特飲街の女性たちは「必要悪」とみなされ、彼女たちの存在が表舞台には現れてはこなかったのである。「隠れた」女性たちの存在を明らかにするとともに、彼女たちがいかなる諸権力に支配され、また彼女たちの従属的な状態が、具体的にどのように都市空間に刻まれ、映し出されたかを、今後も明らかにしていく必要がある。

IV むすびにかえて

日本の地理学におけるジェンダー研究は、スタート地点からまだ余り遠くに進んでいない、というのが現状である。ジェンダーやフェミニズムの持つポリティカルな側面が、中立ではないとして敬遠されるのかもしれない。第二期フェミニズム

で用いられた、「個人的なことは政治的なことである」という有名なスローガンは、個人レベルの問題が、実は、多くの女性に共通する大きな問題をはらんでいることを指摘すると同時に、だからこそ、女性を取り巻く夫や父親などとの家族関係・人間関係を、ジェンダー関係、すなわち権力関係として捉え、問題視していくことの重要性を提示している。これまでの地理学研究では、男女関係という個人レベルの問題にほとんど関心が寄せられることがなかった。

本稿では、そうした個人レベルの男女間に潜む権力関係に着目し、それがより大きな権力関係へと転化され空間に刻まれ、そして、またそれが、空間に映し出されていることを、二つの事例を用いて考察しようとした。最初の事例である大都市圏郊外の住宅地では、職場と家庭とが空間的に切り離されているために、警備員や最新の電子システム、WEBカメラにマスキュリティを付与して、家庭というプライベートな空間の監視が行われていた。これは、男性が支配する空間の生産として捉えることができるだろう。次に、沖縄の特飲街の事例では、第二次世界大戦後の沖縄の都市空間に、戦勝国／敗戦国の権力関係が持ち込まれ、その結果、沖縄の女性が戦勝国の戦利品とみなされ、女性の性が男性によって搾取される空間としての特飲街がつけられたことがわかった。

家庭内や社会での家族関係・人間関係への注目にどまらず、これらの関係が空間を生産・再生産し、空間に意味を与えていることが、二つの事例から明らかになった。ジェンダー関係が具体的に空間に刻まれていく過程や、その結果、ジェンダー化された空間がどのように立ち現れてくるのかなど、より詳細な考察・検討については、前章であげた二つの事例を中心に、別稿を期したい。

付記

本稿の作成にあたり、平成 16～17 年度科学研究費補助金基盤研究(A)「社会経済構造の転換と 21 世紀の都市圏ビジョンー欧米のコンパクト・シティ政策と日本の都市圏構造ー」(研究代表者：鳥取大学 藤井 正)、平成 15～17 年度と同補助金基盤

研究(B)「空間・場所をめぐる諸権力の解明ー沖縄を事例としたフェミニスト分析からー」(研究代表者：奈良女子大学 吉田容子)を使用した。

注

- 1) 1960 年代に入って、アメリカ合衆国で活発に展開された反戦運動や公民権運動に参加した女性たちが、それらの運動内部に蔓延していた性差別的言動を問題視し、自らを解放するための運動を、1960 年代後半～1970 年代前半を中心に起こした。なお第一期フェミニズムは、19～20 世紀前半を中心に、女性参政権獲得など各国の法律上の男女平等問題に力を注いだ。
- 2) ジェンダーは、元来、名詞を性別化して分類する用語として、言語学で用いられてきた。
- 3) ところが最近では、女性学やフェミニズムへのバックラッシュ（逆襲の現象）が生じている。
- 4) 英語圏を中心とするジェンダー研究の系譜や、日本でのこの方面の先行研究については、吉田(1996)、および、影山(2002)を参考にされたい。
- 5) カナダの女性フェミニスト地理学者 Pratt は、Johnston et al. *The dictionary of human geography* の第 3 版(1994)と第 4 版(2000)で、「フェミニスト地理学」の解説を担当している。
- 6) 社会主義フェミニズムは、抑圧の根源を階級のみを求めるマルクス主義や社会主義を批判の対象とし、資本主義社会における性支配や抑圧の解明のためには、階級に代わって性別役割分業を分析の基礎的概念とすべきことを主張した。
- 7) 初期のフェミニズムは、白人中産階級の西洋中心主義的な認識論の枠組の中で、「女性」というカテゴリーを確立した。しかしながら「女性」という差異は、人種、民族、階級、宗教、年齢などの他の差異と結びつくことによって、再び差異の枠組みの中に置かれるのである。
- 8) 近代の性規範が「正常」とする異性愛のセクシュアリティによって構築された、制度的で強制的な社会を指している。
- 9) 2002 年春から一部の区画で建売戸建て住宅の分譲が始まっており、筆者が調査を行った 2003 年秋の時点では、およそ 120 戸が完成、うち 100 戸の

入居が完了していた。

10) A社が管理する「リフレ岬 望海坂」のホームページがある他に、新聞やテレビ、建築や住宅関係のジャーナルなど、多数のメディアを通じて紹介されている。

11) 58戸の分譲戸建て住宅と賃貸メゾネット住宅に加え、分譲マンション1棟を建設する予定。2005年8月現在、一部の区画で戸建て住宅が完成し、分譲・入居が始まった。

12) およそ700haに8万人の居住が見込まれ、1960年代から大規模な住宅開発が始まった。

13) 2005年4月から、第1期の分譲・入居が始まった。

14) アメリカ合衆国のゲイテッド・コミュニティについて、近隣住区におけるコミュニティ形成の観点から詳細に調査した研究がある(Blakely and Snyder 1997)。

15) 1950年代に米軍基地建設が本格化するにつれ、本島各地で、特設街が次々と形成されていった。

16) 現在、八重島と照屋は一般住宅地になっているが、特設街が米兵で賑わった当時の建物が残っている一角もある。センター通り、ゲート通り、中の町、諸見大通りは、飲食店や小売店を中心とした商業地区となっており、特にゲート通りには、外国人相手の衣料品店や土産物店が目立つ。吉原は、現在も旧特設街の面影を強く残している。

17) 現在、風俗営業店の立地が特化する那覇市辻地区一帯には、17世紀後半に琉球王国が公娼制度を設けた際につくられた辻遊郭があった。1944年の那覇大空襲で焼失したが、終戦の6年後に再興された。当時、再興に尽力した高級料亭の女将は「沖縄の塵は旧那覇市の一ヶ所に集めた方が、全那覇市の環境にもよいし、管理もしやすくなる」と考え、当時の警察局長に、米兵相手の特殊地域として辻を指定するよう要請した(那覇市総務部女

性室 2001)。このことから、権力を持った女性が、女性を支配する構造も認められる。

18) 軍作業やメイドなどの米軍関係の仕事は、沖縄の女性がドルを得ることのできる勤め口であった。

(2005年9月27日受付 2006年1月14日受理)

文 献

上野千鶴子 2002. 差異の政治学. 上野千鶴子『差異の政治学』岩波書店: 3-31.

影山穂波 2002. 特設レポート ジェンダー. 人文地理 54: 280-286.

影山穂波 2004. 『都市空間とジェンダー』古今書院.

堂前亮平 1997. 『沖縄の都市空間』古今書院.

那覇市総務部女性室 2001. 『なは・女のあしあと(那覇女性史 戦後編)』琉球新報社: 268-274.

平井和子 1997. 米軍基地と「売買春」—御殿場の場合—. 女性学 5: 120-147.

松井美枝 2000. 紡績工場の女性寄宿労働者と地域社会との関わり. 人文地理 52: 483-497.

村田陽平 2000. 中年シングルを疎外する場所. 人文地理 52: 534-551.

吉田容子 1996. 欧米におけるフェミニズム地理学の展開. 地理学評論 69: 242-262.

Blakely, E. J. and Snyder, M. G., 1997. *Fortress America: gated communities in the United States*. Washington, D.C.: Brookings Institution. 竹井隆人訳 2004. 『ゲイテッド・コミュニティ—米国の要塞都市—』集文社.

Johnston, R.J., Gregory, D., and Smith, D. M., 1994. *The dictionary of human geography* (3rd ed.). Oxford, Cambridge, Massachusetts: Blackwell.

Johnston, R.J., Gregory, D., and Pratt, G., and Watts, M., 2000. *The dictionary of human geography* (4th ed.). Oxford: Blackwell.

<著者略歴> 吉田 容子 (よしだ ようこ)

2002年4月より奈良女子大学文学部助教授 専門は都市・経済地理学, 社会地理学. 博士(文学). 近年の業績: 「地域労働市場と女性就業の地理学的研究 —ジェンダー視点を導入して—」 2004年度大阪市立大学博士学位論文, 「ジェンダー研究と地理学」水内俊雄編 2004. 『空間の社会地理』(シリーズ人文地理学第5巻) 朝倉書店: 59-79 ほか.